



amanojaku

<http://amanojaku.info>

媒体名: バチバチ

日付: 2006年10月



(有)太鼓集団天邪鬼

〒177-0035 東京都練馬区南田中 5-9-11-101

TEL:03-3904-1745 FAX:03-3904-9434 E-Mail: [taikoshudan@amanojaku.info](mailto:taikoshudan@amanojaku.info)

<http://amanojaku.info>

**邦** 楽の世界ってピラミッド型で、先生が右って言えば右という世界。でも、時計の針が普通に回って12を指し、反対から回っても12を指すなら、自分は反対から回ると。その方が難はないしね。太鼓界のアマノジャク的存在になりたかった」

20年前、渡辺洋一は、そんな思いを太鼓集団「天邪鬼」の名前に込めた。プロ集団として活動していた東京・助六太鼓のリーダーの座を退いての決断だった。21世紀の太鼓を見据え、様々な音楽を吸収したいという思い。だが、独立しても、所属していたグループと同じ東京で仕事をしていくのは容易ではなかったという。

「じゃあ、自分のマーケットを作ろうと。当時、アフリカや中南米の音楽を研究していた方に、お前の音はいいよ、新しい音楽を作りなさいと言われ、津軽三味線4人、

和太鼓3人、鼓、ラテンパーカッション、ドラムス、シンセサイザーの11人編成で近未来東京サウンドというバンドを作りました。ビートは、サンバやサルサ。和洋のバトルではなく、融合させた音楽を作りました」

合宿を何度も重ね、自分の熱い思いをメンバーに伝えた。

「お互いの楽器を良く知らないし納得のゆく音など作れないが、プロの奏者というのは、職人みたいで、そうそう教えてはくれない。何度も顔を合わせ、裸の付き合いをしていくうちに、ここで太鼓を入れて欲しいんだよねなどという言葉聞くことができた」

彼らの音楽は評判を呼び、東京代表で海外の万博に参加するなど、あちこちから声がかかるようになった。しかし、5年後バンドを解散。

「お金は稼げるようになったけれど、何か煮え切らない自分がいた。融合させれば



●6月23日、館内練習場にて、天邪鬼メンバーが見本をみせる（左=小川ひろみ・右=影山伊作）

## 伝統と創造の狭間で生きていきたい いつか世界に通じるアーティストが生まれたら



●プロフィール：1958年、東京都荒川区生まれ。幼少から益譲りの太鼓に親しみ、76年助六太鼓に入門して10年間活動する。86年、東京を拠点とした太鼓集団「天邪鬼」を結成し、邦楽、洋楽の両方を吸収しつつ独自の道を歩み始める。また全国各地の創作太鼓の作曲指導にあたり、文化庁文化交流使として海外での指導にも力を入れる。

させるほど、和太鼓の部分が減っていくんです。昔は、気にもとめなかった地方の素朴な太鼓のフレーズが気になり、自分が日本の心を忘れていたと気づいた。普遍的なものを作りたいと思いました」

それまでの打ち方、内面的なものを全て捨て、新しいものを作ろうと決心。

「日本に合ったフレーズを必ず入れるようにし、太鼓の置き方、打法など、今までのやり方を白紙に戻してゼロから組み上げた。構想から7、8年。初めて国立劇場の日本の太鼓にゲストとして招かれた時は、本当に嬉しかった。今思うとこの時、ようやく助六太鼓から脱皮できたのかな。自分が考え出したものだから、弟子にも自信を持って教えることができた」

近年、仕上げた曲で、打法の確立を終え、指導活動に力を入れ始めた。

「先駆者、伝承者として、底辺を拡げていくことは、誰かがやらなければならない仕事。自分が40年かけて得たものを10年、20年あれば伝えられるのではないと思う。いつか自分が携わった子どもたちの中から世界に通じるアーティストが生まれたら嬉しい。伝統にしがみついてもなく、創造ばかりするでもなく、伝統と創造の狭間で生きていきたい。最近の若手は…こじんまりと良くまとまった人が多いね。荒削りでもいいから、ぐっとくるようないい太鼓を聴きたいものです」

今年12月、太鼓集団「天邪鬼」は20周年を迎え、記念のコンサートを計画中だ。渡辺が目指す伝統と創造の狭間で作り上げられた太鼓に期待が高まる。